

8月5日 年間第18主日

出 16:2-4,12-15 エフェ 4:17,20~24 ヨハ 6:24~35

1. ヨハ

v.25 「(群衆は)イエスを見つけると、“ラビ、いつ、ここにおいでになったのですか” と言った。」

あなたは今朝、主日のミサで救い主イエスにお会いしましたか？ 普通のカトリック信者にとって、そんな質問は突飛で場違いなことに思えるかも知れません。なぜなら皆さんそれぞれに自分の役割や奉仕に忙しくしていて、それは確かに“わたしたちのミサ”だからです。共同体としても、また個人としても、たかさんのことが行われていて、みんなが大いに忙しいのです。でも、忙しくてイエスの言葉を聞いている暇がない、そんなミサになってしまっていはいはしないでしょうか。

v.27 「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。」

“十字架のいけにえが教会において絶えず現存するものとなる”(ミサ典礼書の総則 48)ミサを信じることが、私たち信者の共通の体験となることの大切さを、もっと理解しようではありませんか。「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです」(II コリ 5:17)という、生き生きとした体験こそが、ミサの命なのです。「神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく和解の言葉をゆだねられた」(II コリ 5:18)、「神と和解させていただきなさい」(II コリ 5:20)。この福音を聞くために、私たちは今朝もミサでキリストにお会いするのです。

そして私たち会衆は心を一つにして、“生者と死者を裁くために来られる”キリストを信じ、“聖徒の交わり、罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じます”と、信仰宣言を唱えます。キリスト者の生活と行為のすべては、“ミサに結ばれ、ミサから流れ出、ミサに向かって秩序づけられている”(ミサ典礼書の総則 1)と、本当に言える一人一人に成長しようではありませんか。

v.29 「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。」

2. エフェ

v.17 「そこで、わたしは主によって強く勧めます。もはや、異邦人と同じように歩んではなりません。彼らは愚かな考えに従って歩み、……」

「わたしたちは、この御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。」(1:7) 「事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。」(2:8) 「体は一つ、霊は一つです。それは、あなたがたが、一つの希望にあずかるようにと招かれているのと同じです。」(4:4) 「こうして、聖なる者たちは……キリストの体を造り上げてゆき、……頭であるキリストに向かって成長していきます。」(4:12,15)

異邦人とは、このキリスト者が受けた恵み、キリスト者に与えられた神の国の希望を知らない人々のことであって、彼らは福音によってではなく、人間の愚かな考えに従って歩んでいるということを、使徒パウロはここで指摘しているのです。

この世の人々、福音を知らない人々の考え方が、浅はかであるとか、レベルが低いなどと言っているではありません。今から一世紀ほど前の西欧の教会は、未開でレベルの低い世界の国々や民族を、キリスト教文化によって啓蒙するという傲慢な考え方で、海外伝道に邁進しました。しかし、それはキリスト教文化圏の拡張にはなっても、正しい意味での福音宣教にはなりません。そして日本は、現在も福音を知らない国でありつつ、世界の中で冠たる大国の一つになりました。ただ一つの問題は、日本人の考え方が「神の命から遠く離れている」(4:18)ことなのです。決して人間的にも、文化的にも、レベルが低いということではありません。

ですから、もし私たちキリスト者が真に福音の希望に生きているのでないなら、それは“異邦人と同じように歩んでいる”こととなります。

3. 出

v.15 「イスラエルの人々はそれを見て、これは一体何だろうと、口々に言った。」

私たちの“ことばの典礼”は、そして“感謝の典礼”は、“これは一体何だろう”と言って驚く体験が、私たち一人一人の生々しい実感として感じられるような、そんな主日のミサでなければなりません。ことばの典礼で“キリストは自身のことばのうちに現存し、……キリスト自身が語る”のであり、感謝の典礼で“キリストはミサの犠牲のうちに現存し、……聖体の両形態のもとに現存している”ことを(典礼憲章7)、私たちは驚きをもって賛美し、感謝する主の民になろうではありませんか。

v.12 「あなたたちはこうして、わたしがあなたたちの神、主であることを知るようになる。」

アーメン、ハレルヤ。

8月12日 年間第19主日

王上 19:4~8 エフェ 4:30~5:2 ヨハ 6:41~51

1. ヨハ

v.44 「わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。わたしはその人を終わりの日に復活させる。」

イエス・キリストは父に遣わされてこの世に受肉された神の子であって、「わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ 4:25)、信じる者に永遠の命を得させる「天から降って来たパンである」(v.41)ということ私たちが信じるには、恵みが必要であるということを理解しましょう。それは“父が引き寄せてくださった”という特別な恵みであって、キリスト者はただこの“神の恵み”によって救われました(ロマ 3:24、エフェ 2:8 他)。

カテキズムを学ぶときにも、聖書を読むときにも、もし私たちが“信仰によってではなく、ただ多くの知識を得るために”これに取り組むと、“つまずきの石につまずく”ということが起こります(ロマ 9:32)。実際、初代教会でもそのような人が多かったので、ヨハネ福音書は vv.41-43 を、そして 6:60-65 を、警告のために語ったものと推測されます。

「わたしはその人を終わりの日に復活させる」というイエスの言葉の重みを真剣に受け止めないと、正しく「永遠の命」を理解することが出来ません。私たち人間の生涯は有限であり、この世もやがて滅びる時が来ます。来るべき世、つまり神の国こそが永遠なのであって、イエス・キリストは信じる者に“来るべき世の命”を与えてくださるのです。「実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。」(1 コリ 15:20)

ミサの“ことばの典礼”で聖書が朗読される時、復活して神の右の座に着いておられる天上のキリスト御自身が私たちに語ってくださいます。また“感謝の典礼”では天上のキリストが私たちの祭壇に降って来て、御自身の肉と血である「生きたパン」(v.51)を私たち一人一人に与えてくださいます。

v.51 「このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。」

v.44 「わたしはその人を終わりの日に復活させる。」

2. エフェ

4:30 「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです。」

5:2 「キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、……」

それは私たちが、「一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハ 3:16)ことを、特に強調したい

と思います。教会は、地上でこの救いの恵みを共有している唯一の共同体なのです。教会はこの与えられた救いの恵み、すなわち委ねられた信仰の遺産を、主が再び来られる日まで守ることに最大限の努力を払わなければなりません。ですから、“カトリック教会のカテキズム”の冒頭に置かれた使徒憲章の表題は、“ゆだねられた信仰の遺産”となっているのです。

3. 王上

v.8 「エリヤは起きて食べ、飲んだ。その食べ物に力づけられた彼は、四十日四十夜歩き続け、ついに神の山ホレブに着いた。」

多くの人が楽天的に、“人間はだれでも死ぬと、自動的に天国に行く”と思っています。しかし本当は、「入ろうとしても入れない人が多い」(ルカ 13:24)のです。エリヤの人生において、彼がここで神の山ホレブに着いたことは全くの奇跡、いわば予想外のことであったと言って過言ではありません。彼は一度は神に向かって、「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません」と、辞世の言葉を発したのでした。神は彼の人生の困難と苦しみをいささかも軽くしてはくださらなかったけれども、彼の枕元に焼き石で焼いたパン菓子と水の入った瓶を備えて言われました。「起きて食べよ。この旅は長く、あなたには耐え難いからだ。」(v.7)

カトリック教会には確かに、イエス・キリストによる救いの恵みという信仰の遺産が委ねられています。しかしそれを、地の中に隠しておいては役に立たないのです(マタ 25:25)。神の国に入ることはそんなに簡単ではないのです(使 14:22)。しかし私たちは、「起きて食べよ」と語ってくださる神に感謝しようではありませんか。この教会に委ねられた信仰の遺産を“食べる”ことなしには、私たちの人生の旅は長く、耐え難いことを理解しましょう。他のどのような労苦と功績によってでもなく、“ゆだねられた信仰の遺産”という「その食べ物に力づけられて」、永遠の命を手に入れることが出来ますように(1テモ 6:12、フィリ 2:12 参照)。 アーメン、ハレルヤ。

8月19日 年間第20主日

箴 9:1~6 エフェ 5:15~20 ヨハ 6:51~58

1. ヨハ

v.51 「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生きかすための私の肉のことである。」

v.58 「これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」

まず、永遠に生きる(ζῆσει εἰς τὸν αἰῶνα)とは、来るべき世に生きるということであって、永遠の命とは神の国に生きる命のことなのです。受肉された神の子イエスは、その生涯と死と復活によって世に命を与える救いを実現されました。v.51 の ὑπὲρ τῆς τοῦ κόσμου ζωῆς を、新共同訳聖書は「世を生きかすための」と翻訳し、フランシスコ会訳は「この世に命を与えるための」と、そして口語訳は「世の命のために与える」と、それぞれたいへん苦労して真意を伝えようとしています。

私たち信じる者に永遠の命を得させてくださったキリストのいけにえが、ミサにおいて秘跡的に再現されることによって、すべてのキリスト者はその信仰を養われ、教会を造り上げてゆき、やがて実現する「神の栄光にあずかる希望」(ロマ 5:2、エフェ 1:18)に向かって人生の旅を続けて行きます。

教会ではよく、「交わりを大切にしよう」という声を耳にします。しかし残念なことに、この“交わり”という言葉の意味を正しく理解していない信者が多いのです。例えば感謝の典礼の中で、会衆が互いに“平和のあいさつ”を交わすときに、そこにある出席者同志の“交わり”が正しい意味で理解されているのだろうか、心配せざるを得ないのです。

vv.56-57 「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きているように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。」

この「御父と御子イエス・キリストとの交わり」(ヨハ 1:3,7)こそが、共にミサをささげる教会の“交わり”なのです。キリスト者の喜び、共にミサをささげる喜びは、この“交わり”の喜びであって、これを“何か別の(人が作り出す)喜びや楽しみ”で置き換えようとするなら、それは愚かなことです。

2. エフェ

vv.15-16 「愚かな者としてではなく、賢い者として、細かく気を配って歩みなさい。時をよく用いなさい。今は悪い時代なのです。」

愚かな者とは、“時”を知らない人のことです。それは一般的な意味での時ではなくて、信仰によってだけ知ることの出来る“救済史の時”(ロマ 13:11)、“終わりの時”(ヨハ 2:18)のことです。共にミサをささげ

ている各地の教会に送られた励ましの手紙の中で、使徒ペトロは次のように述べました。「あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。」(Iペト 1:5) そうなのです。私たちはミサの“ことばの典礼”と“感謝の典礼”によって、“神のことばの食卓”と“キリストの体と血の食卓”にあずかり、“神の栄光に与る希望を誇りにしている”(ロマ 5:2)のです。その訪れの“時”を知らなかった愚かなおとめのようになってはなりません(マタ 25:1-13)。

3. 箴

v.6 「浅はかさを捨て、命を得るために、分別の道を進むために。」

自分の箸で料理を取ることをしないで、誰かが食べさせてくれるのを待っているのは、巢立ったばかりの幼い小雀のような人であって、そのような信者に対して使徒パウロは「相変わらず肉の人」(Iコリ 3:1-3)と言って非難しています。しかし私たちは、教会に“神のことばの食卓”と“キリストの体と血の食卓”がいつも備えられていることを感謝出来る、成長した信者になろうではありませんか。

「これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」(ヨハ 6:58)

神の小羊の食卓に招かれた者は幸い。ミサに集まる一同が、「今や、恵みの時、今こそ、救いの日」(IIコリ 6:2)と感謝し、心からほめ歌う「賢い者」(エフェ 5:15)になれますように。

アーメン、ハレルヤ。

8月26日 年間第21主日

ヨシュ 24:1～18 エフェ 5:21～32 ヨハ 6:60～69

1. ヨハ

6:1からのガリラヤ湖岸での出来事、命のパンの奇跡について語った後に、ヨハネ福音書は共にミサをささげている教会にとってのいわば現在の課題を、主と会衆の間の対話の形でここにまとめています。

v.63 「命を与えるのは、“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。」

私たちが感謝の典礼で拝領するパンは、天に上げられたキリストの御からだであって、司祭は奉献文における第一のエピクレシス(聖霊の働きを求める祈り)で、「いま聖霊によって……わたしたちのために、主イエス・キリストの(復活の)御からだと御血になりますように」と唱えます。それは単に過去のガリラヤでの出来事を記念する親睦の会食ではありません。

v.65 「父からお許しがなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない。」

感謝の典礼に与ることが出来るのは、ただ神に招かれた人々だけであり、彼らはその招きによって洗礼の秘跡へと導かれ、聖なる普遍の教会に接ぎ木されました。ですから拝領前の信仰告白で、司祭は「神の小羊の食卓に招かれた者は幸い」と唱えます。

v.68 「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。」(拝領前の信仰告白/「主よ、あなたは神の子キリスト、永遠の命の糧、」)

確かに、この信仰告白が必須であることを私たちは知っています。しかもこの信仰告白は、神の恵みによってだけ与えられるものであることを(6:44 参照)、私たちは決して忘れてはならないのです。「あなたがたの救われたのは恵みによるのです。」(エフェ 2:5)

2. エフェ

v.32 「この神秘は偉大です。わたしは、キリストと教会について述べているのです。」

使徒パウロは、“教会を造り上げる”(4:12)という課題のために、ここで妻と夫、親と子、奴隷と主人という私的な人間関係を取り上げて、論じています。また別のところでは、教会における監督(司教)の資格、奉仕者の資格を取り上げて、より公的な人間関係についても論じています(1テモ 3章)。

ところが私たちはしばしばこのテキストを、そのような聖書における“教会を造り上げる”という課題から切り離して、信仰とは何の関係もない一つの道徳的な“愛の教え”として、結婚式で聞かされて来たのではないのでしょうか。実はこのテキストを正しく理解する鍵は、「わたしたちは、キリストの体の一部なのです」(v.30)という言葉にあるのです。

「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。」(1:7) 「あなたがたは、

一つの希望にあずかるようにと招かれている」(4:4)のですから、「(御父が……)聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるように。」(1:18)

これが“教会を造り上げてゆく”前提なのです。この前提に、すなわち「わたしたちは、キリストの体の一部なのです」ということに、私たちが今朝再びアーメンと応答することを、神は求めておられます。

3. ヨシュ

v.15 「わたしとわたしの家は主に仕えます。」

v.18 「わたしたちも主に仕えます。この方こそ、わたしたちの神です。」

この24章はおそらく、古代イスラエルにおいて12部族の連合(アンフィクティオニー)の祭儀が、シケム近くの聖所で毎年定期的に行われていた時代の伝承に基づく、後の申命記史家によるヨシュア記への付加と考えられているものです。この祭儀において各部族は、自分たちがイスラエルの12部族の連合に所属するか否かを、改めて明確にしなければなりません。伝えられている旧約聖書からは、最早その歴史的紀元や詳細を知ることが出来ませんが、現代の私たちがそこから聞くのは、彼らの定期的な祭儀が意味していたものは“神と民との契約の更新”(24:25)であったということです。

それはまさに、私たちの“ともにささげるミサ”を理解するための光であり、会衆がそこで朗読される聖書から正しく“神のことば”を聞くことを教えてくれるのです。私たちのミサにおいて毎回秘跡的に再現されるのは、“キリストの血による新しい契約”なのです。そこで私たち一人一人は、自分がキリストの体である共同体に属するか否かを、改めて明確にしなければなりません。

キリスト教的文化や教養を広め、古い時代の西欧的価値観や倫理観を共有するために、同好の人々が集まって来るだけのような教会のミサには、根本的に欠けているものがあるのです。「わたしたちも主に仕えます」とは、個人的な、主観的な心の持ち方以上のものです。それは、「わたしたちは、キリストの体の一部なのです」という“キリストの血による新しい契約共同体”に参加する、“契約の更新”なのですから。

アーメン、ハレルヤ。